

濡れにぞ濡れし

外村 繁



講談社



昭和三十六年十一月二十日第二刷発行 定価三〇〇円

濡れにぞ濡れし

著 者 外 村 繁

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽町三ノ一九
振替 東京 三九三〇番
電話 (内二) 大代表 三一一一

印 刷 所 豊国印刷株式会社

東京都文京区大塚坂下町一二四

製 本 所 大 製 株 式 会 社

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

濡れにぞ濡れし

外村

繁

裝
幀
村
上
豐

——見せばやな小島の海女の袖だにも

濡れにぞ濡れし色はかわらじ——

涼しい風の吹く夕

毎年、八月末の地藏盆には、私達の字にある、十数カ所の地藏堂の扉は開かれ、御詠歌の声と、冴えた鐘の音がひびいてくる。

道端の塀や柱にはたくさんのかけ行灯かぎでんがかけられ、道を渡して、大きな行灯もかけられる。浴衣に着換えた村人達は、お堂からお堂へ参り歩く。

幼い頃、私も私の子守の美代に手を引かれ、地藏堂へ参りに行った。そんな時、美代は薄く化粧している。美代は美しく、子供心にも私はそれを誇らしく思った。また美代の手はふっくらと柔く、温かったようにも記憶している。

地藏堂はお宮の森蔭にもある。大日地藏である。村中を流れている川の中に立っているお地藏さんもある。川中地藏である。村外れの辻にも地藏堂がある。外ヶ辻地藏である。遠く誘蛾灯が立ち列んでいる青田が続き、夕風が緑の

波を打たせて吹き渡って来る。

一つ積んでは父のため

二つ積んでは母のため

三つ四つのおさな子が

もみじのような手を合わし

南無観世音大菩薩……

私は美代と並んで地藏堂の前にしゃがみ、賽銭を投げて、手を合わす。石のお地藏さんはたくさんのろうそくの火に守られ、新しいよだれ掛をかけている。

お地藏さんの前には菓子や、とうもろこしや、ほうずきなどが供えてある。地藏堂の世話役の人が、いくらかの菓子を私の手の上に乗せてくれる。不意に、行灯に留まった馬追が、きれいな声で鳴き出したようなこともあった。

子供が死ぬと、賽さきの河原におちなければならぬといふ。一面、岩石ばかりが転がっている、荒涼とした風景を想像するより他はなからう。

死んだ子供はその河原の石を積み上げて、父母の供養の塔を築き、先立った不孝を詫びなければならぬという。が、忽ち鬼が現れ、折角、子供達が積み上げた石を打ち崩してしまふ。子供達はお地藏さんの衣の袖に隠れて、辛うじて難を逃れるという。

が、鬼が去れば、子供達はまた石を積み重ねなければならないの

である。何という空しい努力を繰り返さなければならぬのか。しかし幼い私には、折角、積み上げた積み木が崩れた時の、あの口惜しさを連想するより他はなかった。

「美代、悪いことをせんでも、子供が死ぬと、賽の河原へおちんならんのやろか」

「ほうらしいのだす」

「悪いことせんのに、なんでやろ」

「親より先きに死ぬのがいかんのどすやろなあし」

「ほやかて、子供やかて、死にとうて、死んだんやないのにな」

「ほんでに、お地藏さんが助けておくれやすのどす」

「ほうか」

家に帰ると、母が待っていて、冷い麦湯を注いでくれる。父は多く東京の店にいて、留守がちである。家の庭にも、降るような虫の音である。しかし私の耳には、哀調を帯びた御詠歌の声と、鉦の音がいつまでも消え残っていた。私はもちろん鬼は恐しかった。化けものも私は恐しい。二丈坊、ろくろ首、一目小僧、のっぺらぼう、さまざまな化けものがいた。田舎の家は広く、大きく、反対に照明は薄暗い。幼い脳裏には、直ぐそんなものの影を映す。

当時は、また狸も化けた。狐も、貉も化ける。美しい女に化ける。入道坊主にも化けるといふ。大寺の縁の下には

古狸がいて、いつかも白髪の老僧が手の上の炭火を頻りに吹きおこしているのを見た人がいるともいふ。私はまた幽霊も怖かった。死人も怖かった。白張りの破れ提灯も恐しいものの一つであった。

人間の中にも恐しいものがある。もちろん人殺しも、強盗も恐しい。が、子供の私には、子供りもなかなか恐しかった。

当時といっても明治の末年である。最早、子供りとか、人買いなどというものはいなかったかも知れない。が、子供の遊戯には、子供りや人買いに因んだものが非常に多かった。

「子をとろ、子とろ」——親の後の帯につかまって、子供達は順々に後に列ぶ。鬼は一番後の子をつらうとする。親が両手をひろげ、鬼を防いでいる間に、子供達の列はうねり、よろけながら、逃げまどう。

幼いものの頭というものは至ってかよわいが、初々しい。そんな遊戯の中の感情さえ、直ぐ実感ともなつて、子供の頭の中に錯綜するもののようにである。

奇妙なことに、私は巡査も怖かった。巡査は悪い人を捕えてくれる人であることは、幼い私にも判っている。が、あのサーベルの音だけで私を怖がらせるには十分である。まして巡査は人を捕えると、その手を後に廻して、綱でくく

るという。私は自分の手をそつと後に廻してみる。言いよ
うのない恐怖を感じる。

私は医者も怖かった。医者が病氣を直してくれる人であることは、私にも判っている。が、私はあの鋭く光っている器具が怖いのである。ある日、女中達が片腕を出し、胸に着物を押えている。美代も片手を懷に入れ、片肌脱ぎになろうとしている。

「何してるのや」

「チューシャ」と、糸子が口を突きだして言う。私はあの尖った針が彼女等の皮膚に突き刺さる瞬間を想像してみ
る。思わず、私は美代にしがみついた。

子供は死ねば、悪いことをしなくても、賽の河原におち
るという。嘘をつけば、鬼に舌を抜かれるという。御飯を
一粒でも粗末にすれば目が潰れるともいう。

「悪いことをしませぬように」

「病氣になりませぬように」

朝夕、私は仏壇の前に坐って、手を合わせるより他はな
かった。

田舎の四季

桜の花が散っている。青く霞んだ空の中から、白い花び
らは高く、低く翻りながら、後から、後から散ってくる。

私は緋の前掛をひろげ、桜の落花を受けていた。前掛の中
には数片の花びらがたまっている。青い空の中ではあんな
に白く見えたのに、花びらはいずれも薄く紅をさしている。

一枚の花びらが、私の目の前を散って行く。私はその花
を追う。が、花びらは春の微風に乗って、次第に高く舞い
上りいつか空の青さの中に消え入ってしまう。空には春の
光が満ち溢れ、私はひどく眩しい。私は片手を上げて、臉
をこする。裏の畑の菜の花の高い香が漂ってくる。

私の前に、小さい裏門がある。今まで私は一人で門の外
に出た記憶はない。初めて一人で門の外に出てみようか、
と考える。臆病な私にとってはかなり冒険である。私は裏
門を開き、外に出た。

私はひどく緊張して、人影のない道を歩いて行った。百
メートルほど行くと、道は十字に交又してい、横の道に沿
って川が流れている。

その石橋を渡り、右折すると、私の家の表門である。ま
っ直ぐに行くと、俗に上島かみじまと呼ばれている畑地に出る。

私が石橋にさしかかった時、突然、上島の方から、異様
な風が吹き起ってくる。顔を上げると、いつの間にか、東
北方の空は黒い雲に覆われている。

風は次第に荒々しく吹き募ってくる。しかし西南方の空は青く、春の陽は依然として降り注いでいる。この意外な気候の激変に、思わず、私はわが家の表門の方へ駆けだした。

風はますます激しく荒れ狂っている。桜の花は無惨に飛び散っている。私は背戸口に立つて、この凄じい光景に見入っていた。既に陽はかげり、大粒の雨も降ってくる。芭蕉の大きな葉が高くあおり上げられている。そこへ美代が裾をからげて、駆けこんでくる。

「急に、どうしたんやろ」

「てんぐ風どす」

「てんぐ風でなんや」

「どこかを、てんぐさんが通りやしたんどすのやろ」

「ほんでにか、風は上臈の方から吹いてきたわ」

果しててんぐさんがどこかを通ったのかも知れない。風勢は急に弱まり、再び太陽も照り始める。その後には、散り敷いた落花が雨に濡れていた。

今日も雨は降り続いている。かなり強い雨で、しぶきを上げて降っている。地上には、うつぎの白い花が散り落ちている。遠く半鐘が鳴っている。愛知川が増水し、五位田の堤防の急を告げる半鐘であるという。

愛知川の河原へは男衆の亀吉に背負われ、兄や姉と行っ

たことがある。長い橋があったのを覚えている。あんな大きな川に、濁水がうずまき流れるさまを想像しただけで、私は戦慄を覚える。

中の庭には、梅、桜、椿、なつめ、ろうばい、梅もどき、ざくろ、びわ、いちよう、柿、うつぎ等の雑木が植え込まれている。

雨はそんな木々の葉をたたき、廂を打ち、水溜りを鳴らして降っている。そのさまざまな濁音と、半濁音が重り合って、かなり騒々しい。雨音の中に、急を告げる半鐘の音が鳴り続いている。

私は東の裏の池の岸にしゃがんでいた。川の水は上の口から流れ入り、ゆるく池を廻って下の口から流れ去る。

水の上を、数匹のあめんぼが花車な脚を立てて渡って行く。時々、銀色の腹を翻して、飛び上る。池の隅では、黒ごまのような水すましが、互に弧を描いて廻っている。この虫は驚くと、尻を上にして水に潜るが、水中では背が水をはじくのか、銀色に光って見える。

背に三角の斑点のあるはやの子が群って、水面すれすれに泳ぎ廻っている。鯉や鮒は岩陰でゆるく鰭を動かしている。水際に枝を垂れている萩が、水面に白い花を落す。一匹の鯉がゆっくり浮き上って来て、丸い口を開いて、萩の花をたべる。が、鯉は直ぐ花を吐き出すと、またゆっくり

と沈んで行く。

私は駄を取つて来るため、立ち上る。その時、外の道を駆けて来る足音が聞えた。

「大へんや、首吊りやがな」

男の声である。女の声が聞き返している。

「ええ、首吊りてて、どこでやいな」

「石馬の一本杉のところや」

「ほうか。怖いことな。誰やろな」

「シユウニユウヤクやという話や」

「ふうん、どうやったんやろな」

道を駆け去る足音が聞えた。陽は西の空に傾き、秋の斜陽が土蔵の白壁を赤々と照らしていた。

夜になって、あの激しい雪おろしの風も止んだ。或は雪になつてゐるかも知れない。私はもう床の中に入つてゐる。枕許の行灯の灯が天井に丸型の火影を映している。

寒念仏の鉦の音が響いて来る。或は鉦の音まで虚空に凍てついてしまふのではないか、と思われたりする。若しも雪が降つてゐるとすれば、こんな夜に、雪女が現れるのかも知れない。雪女を救おうとすると、却つて男の方が凍え死ぬという。またこんな夜ふけには、丑の時参りも通るのではないか。が、目をつむれば、恐いものの姿が浮かび出そうで、それならない。

血の池地獄

「行くんや」

私は泣きながら、美代の背中でそう言う。しかし美代が歩き出すと私は美代の背中で反り返つて、泣き叫ぶ。

「行くの、怖いもん」

字の中央に小堂宇がある。定まった檀家もないままに、一老尼が守つてゐる。そのお堂に地獄極楽の絵がかけられる。私はその地獄絵が恐しく、美代の背に負われて、逃げるようにして帰つてきたのである。

地獄絵の中の男の亡者は禪をしめ、その肌は褐色にぬられてゐる。女の亡者は短い、赤い腰巻をつけ、その肌はまっ白にぬられてゐる。血と焰の、あくどい色彩を背景にして、そんな亡者達が惨酷な刑罰を受けてゐる。

針の山に登つてゐる男亡者もゐる。舌を抜かれてゐるものもゐる。しかし閻魔王の鏡には、出刃包丁を振り上げてゐる、男亡者の生前の姿が写し出されてゐる。私も観念の目をとじるより他はなかった。

が、女亡者達はこの世にいた時、一体どんな悪いことをしたのであろうか。

血の池地獄におち、片手で涙を押えている女亡者もいる。血が白い肌を汚すではないか。

灯心を持って、竹の根を掘っている女亡者もいる。定められた時間の中に竹を掘り起さないと、どんなむごい責苦にあわなければならぬかも知れないのである。

が、灯心で竹の根が掘りおこせるものではない。果してその「時」がきたのであろうか、一人の女亡者の後には、鉄棒を振り上げた鬼が、迫ってくるではないか。

地獄の絵の中の女亡者達の姿は、最早、私にとって絵空ごとではなかった。白いなで肩も、固く合わされた、二つの膝法師も、私の極めて身近にある。

現に美代の肩の柔かい感触を、私は初めて私の手に感じた。これは決して後年になってつけ加えられたものではない。おぼろげながら、今もその記憶が残っている。

つまり奇怪なことに、絵の中の女亡者の半裸の姿から、私は生れて初めて現実の女を感じた、とも言えなくもない。しかしそれを直に性といってしまえば、少しく早計のようにも思われる。或は愛といった方が適當であるかも知れない。とにかくそれは肉体から肉体へだけに、じかに通じ合うことのできる、極めて素朴で、親身なものであろう。

その頃、私は母と風呂へ入っていた。母がいない時は、美代や糸子に入れてもらったはずである。香しい薬の匂い

や、湯気のついた浴室のガラス窓は覚えてるが、そんな女の姿態は何一つ記憶を結んでいない。

つまり私の性はまだ目覚めていなかった、と考える方が正しいであろう。また私が性を感じるようになってからは、若い女中と風呂に入るようなことはなかったのである。

どんな濃い湯気の中でも、母がいつも前に手拭をあてていた姿は、今も記憶に残っている。しかし私は小学校の上級生になっても、母と風呂へ入っていたから、それは後年の記憶であるように思われる。

従って、次ぎのように言換えることができるかも知れない。地獄絵の中の女亡者達は赤い腰巻の下につつましく膝を合わし、いづれも内股である。私はそんな女亡者の姿に女らしさを感じたのである。

つまり極度の恐怖が、初めて私に女というものを感じさせたとしたら、私の血肉の中に潜んでいた性が、マゾヒズム的な刺戟によって、一瞬、発現したのではないか。

そう言えば、血の池地獄には女亡者ばかりが入っていた。女だけが犯す罪というものがあるのだろうか。何か秘密があるように思われてならない。

私は急に美代のが不安になってくる。もしも美代もあんな姿にならなければならぬとしたら、どうすればよ

いのか。

或は、被虐的な好奇心であつたかも知れない。が、いずれ逃れられぬものなら、美代のために、私はいっそその恐怖を見届けてしまいたいようにも思った。しかしやはり私は恐しい。私は美代の肩に乗りだし、両手で美代の目を覆うて、言つた。

「走って行くんや」

これは私の幾つの時の記憶であつたか。少くとも女中の背に負ぶさつていても、恥しくなかつた年齢であつたことは確かである。そんな幼い心にも、こんな感情が湧くものと、私はいつも疑つてみる。

或は、幼年者の心の方が、はっきりと形を結ばないままに、却つてさまざまの感情が妖しく揺れ乱れるのではないかと、近来、思われて来た。

郷里の家の門内の石だたみの上であつたことは、確かに覚えてゐる。春であれば彼岸桜、秋であれば芙蓉の花が咲いてゐたはずである。が、その記憶は少しもない。

菜の花の咲く道を

小学校へ入った。学校には普通の家庭と異つた、正しい

秩序と、きびしい空氣があつた。私の精神は快く緊張する。

殊に当時の私達の小学校には、新時代の氣風が漂つてゐたように思われる。明新文庫と呼ばれる図書室もあつた。テニス部もあつた。学校郵便も行われていて、いずれも上級生が運営してゐた。

一年の受持は加宮先生である。加宮先生は下ぶくれのした丸顔で、前髪の突き出た、底髪にゆつてゐる。紫の袴をはき、足袋はいつもまっ白かつた。私にはそんな先生が極めて氣品高く見えた。

しかし授業を終ると、加宮先生はひどく優しくかつた。運動場に先生の姿を見ると私達は競つて先生の手にぶらさがらる。先生の手につかまっておれば、上級生も恐しくない。私が顔を先生の腰のあたりに寄せると、袴の紫が霞んで見えた。

黒板には、旗や、風や、こまの絵をかいた掛図がかけてある。絵のかたわらに、その物の名が片仮名で書いてある。

加宮先生は竹の鞭で片仮名を指ししめす。生徒達は餌を求める燕の子のように口を開いて言う。

「ハータ」

「はい」

「ターコ」

「はい、つづけて」

「ハータ、ターコ、コーマ、マーメ」

先生は殊更順序を違えて指すこともある。生徒達の中には、そんなものを全く見ていないものもある。忽ち、「ハータ」と「コーマ」とが乱れ合ったりすることもある。

算術の時間である。黒板の上には「 $6+5=$ 」と書いてある。初めてアラビヤ数字を教えられた時、私はひどく新鮮な感じを受けた。そうして私は算術が好きになった。

二足す三や、三足す四は易しい。直ぐに答が得られない時は、両手の指をその数だけ立て、顎でしゃくって数えればよい。しかし六と五では十指に余る。

「六足す五はいくつか。さあ、少しむつかしくなりましたね」

加宮先生は白墨を取り、いつものように左手で軽く袂の袖を押え、「 $5+1=$ 」と書く。

「それでは、五足す一はいくつでしょう」

「ハイ、ハイ、ハイ」

そうか、と、私は思う。五足す一は六である。すると六足す五は、五に五を足し、更に一を足せば十一である。

私は加宮先生から与えられた鍵で、私の頭の中の知識の扉が次ぎから次ぎへ開かれて行くように思った。

しかし学校でも、その頃の小学生達はみだらなことを盛んに口にした。全く実感を伴わないのであるから、却って極めて露骨である。指を握って、鼻先に突きつけたりもする。

壁や、塀に、変な形の楽書がしてあるのも、学校へ通うようになってから、私の目に入る。そしてそれが何を意味しているかを、いつともなく知ってしまう。しかしそんなことには全く興味が無い。

が、何となしに、それが禁忌すべきことであることは知っている。もちろん理由は判らない。また、それを知ろうとする気持も少しもない。しかし少年達は総べての禁忌されたものを犯す興味は十分に持っている。

二年生になった時、加宮先生が学校をやめるという。新しい受持の朝井先生に引率され、二年生は村外れまで加宮先生を見送ることになる。両先生を先頭にして、私達は列を作って、村中の道を歩いて行った。

「加宮先生で、嫁入りしやはるのやて」

「ほうか。ほすと、先生やかて、やっぱりしやはるのやるか」

「ほら、ほうよい。ほんなこと、きまったあるがな」

ふと、私はそんな会話を耳にする。私は私の心の中の神聖なものを冒瀆されたようで、激しく否定する。しかし私

が何を否定したのか、その内容ははっきりしていない。

大日地藏堂の前に、私達は整列する。その前に加宮先生が立った。地藏堂の先には人家はなく、田には蓮華草の赤が、畑には菜の花の黄と、麦の緑が、それぞれ方形に劃されて、続いている。

加宮先生のお別れの挨拶が終った。私は一生懸命に涙をこらえている。加宮先生が歩き出した。やがて、道は菜の花畑の間に曲り入っている。

春の陽が菜種畑の上にも降りそそぎ、あたり一面、金色の光が燃え立っているようである。加宮先生は私達の方へ顔を向けて、立ち去って行く。しかし菜の花に遮られて、先生の足の方は見えない。不意に、菜の花の黄色が、私の目一杯に霞んでしまった。

「男のくせに、泣きよった」

「ほうよい、先生のひいきやったで、泣きよったんや」

帰途、私は友達にいじめられる。朝井先生は加宮先生より更に若い、女の先生である。

交 尾

二匹の紋白蝶が飛び交っている。一匹の蝶が離れて行く

と、それを一匹の蝶が追って行く。しかし一匹の蝶も逃げて去ってしまうわけではない。また縫れあいながら、帰ってくる。

「先刻から、あの蝶蝶ら、何しとるのやろ」

取り入れた洗濯物をたたんでいた美代が、顔を上げて言う。

「鬼ごとでもしとるのどすやろ」

その時、一匹の蝶がびわの葉の上に翅を伏せてとまったかと思うと、その尻をくの字型に曲げた。すると、もう一匹の蝶もその上に飛んで来て、二匹の蝶は重なり合って飛び立った。

「あれ」

「美代、何しよったんや」

「ほんなこと、知りませんもん」

二匹の蝶はもう私達の視界にはいかなかった。

初夏の頃、空から鈍い陽がさしている。大裏の畑には、えんどう豆の花が咲き、ねぎ坊主もたくさん出ている。

ねぎ坊主がねぎの花であることは、運動場の隣の畑で、朝井先生に教えられた。すると、この擬宝珠の形をしたのは、ねぎの蕾であろうか。

その球状のねぎの花の上に、黄金虫のような小さい虫がいるのを、私は発見した。こんな花にも甘い蜜があるので

あろうか。じつと動かないものもある。不器用な足つきで、花の上を歩いているものもある。

更によく見ると、どのねぎ坊主の上にも同じ虫がいる。中には、一匹が一匹を負った形で、二匹が重なり合っているものもある。

こんなところで、こんな虫が何をしているのか。私は不思議でならない。或はこの虫達にとっては、この小天地が一番好きな場所なのかも知れない。

二匹が重なり合っているのは、先刻から少しも動かない。が、一匹だけの多くは、それぞれのねぎの花の上を不恰好に匍い廻っている。

春になると、兄と私は、深い壺の中で冬を越させた金魚を、蔵前の泉水や、ガラス鉢の中に入れてやる。殊にガラス鉢のきれいな水の中を、赤い金魚が泳いでいるのは、いかにも春が来たようで、気持がよい。

私は鉢や、溝の中の糸みみずを金魚にやる。時時、上水も取り換えてやらねばならない。金魚はよく馴れ、餌をやろうとすると、水面へ浮き上って来るようになった。

そんなある日、一匹の金魚が一匹の金魚を盛んに追い廻している。私が金魚鉢の縁を叩くと、金魚は暫く追うのをやめるが、また直ぐ追い廻す。両方とも同じ金魚である。赤と白のが、赤いのを追い廻すのである。

「美代、金魚まで鬼ごと始めよったわ。赤白、きついけずやわ」

「へえ、ほうですか」

美代と並んで、針を運んでいた糸子が、顔を上げて口を挟んだ。

「ほういう時は、楊の根を入れてやるとよいのだすて」

「何でやろ」

「卵を産むのかも知れんのどす」

「ふうん。金魚で、追わいかけ合ひして、卵を産みよるのか」

「ほんなことは、どうや、知りまへんけんど」

私は泉水の楊の根を分け、金魚鉢に入れてやった。

ある朝、金魚鉢を覗くと、楊の根に卵のような小さな粒が点点とついている。私は糸子を連れて来て、言う。

「卵やないやろか。これ、金魚の卵やないやろか」

「卵どすなあし、金魚と別にしてやらな、あかんのどすて」

「なんでやろ」

「卵をたべてしまひよるのだすて」

「自分の産んだ卵をたべよるのか。阿呆な奴やな」

私は糸子に手伝われて、金魚を別の容器に移した。

それからどれだけか経った朝、私は夥しい数の、極めて小さい、糸のようなものが、僅かに動いているのに気がつ

いた。じつと見てみると、頭と思われる部分もついている。尾鰭らしいものも、辛うじて見分けられるではないか。私は驚嘆した。このような小さい命が、一体、どこから生じて来たか。私はその不思議さに呆然となる。

しかしこんな小さい生命を保つことは、非常にむづかしいことなのであるうか。漸く生き残ったのは七、八尾に過ぎない。既に金魚の形をしていたが、その色は黒かった。が、やがて、腹の方から黄色く変色して行った。

私は再び驚嘆の声を發した。

今年生れた、鶏の雛は、六、七月頃になると雌雄の別を生じ始める。雄の鶏冠は大きくなり、八月にもなると、雄はまづい声ではあるが、時をつくろうとする。

旧い雌鶏は、新入りの雌をひどくいじめる。雄鶏は差別がないらしく、今年の雌にも挑みかかる。

今年の雌は初めは逃げるが、幾度目かには、旧い雌達と同じように、自分から脚を屈め、尾羽を上げる。雄は雌の首をくわえ、荒々しく雌の背に飛び乗る。

あの時、そんなところへ通りかかった母が言った。

「今年の雌もさかつてるな。嬉しいこと、もうじき、卵を産み出してくれるやろ」

「さかる」ということが、何を意味するかは、既に私も知っていた。そして何となく忌むべき言葉のように思ってい

たが、「さかる」ことが「卵を産み出す」ことに直接関係があるとは知らなかった。

しかし母の顔には禁忌に触れるような表情は少しもなかった。というより、母は禁忌を犯すような人ではない。少くとも人間とは関係のない言葉のようである。何となく私は安心する。

当時の人はよく「万物の霊長」という。或は人間が万物の霊長である所以かも知れない。

夕 映 え

学校から帰った私は、母の前で三時の菓子を食べていた。そこへ女中の菊枝がただならぬ様子で駆け込んで来た。

「おたけどんが、おたけどんが……」

と、菊枝がいうのを私は聞いた。

「大裏の小屋で……」というのを私は聞いた。が、次ぎの瞬間、血相を変えて駆け出して行く母の後から、私も走り出していた。

「晋は来てはいかん」

突然、母が振り返りざま、そう言う。

「菊枝、晉をとめなはい」

私は菊枝に抱きとめられ、ひどく不満である。私はかなりヒュ머니スティクな気持ちになっていたからである。

「なんで、行ったら、いかなのや」

「おぼんさんの見やしては、いかんもんどす」

「僕の見て、いかんもんで、何やのや」

「ほんなもん、口で言うても、いかんもんどす」

目で見てもないもの、口で言ってもいけないものとすれば、最早、私は口をつぐむより他はなかった。

それ以来、私は私の家の女中であつたたけの姿を見ることはなかった。たけは大裏の小屋で、死んだ子を産んだという。そうしてその夜中、たけは、長持に乗せられ、その生家へ送り歸されたという。

多分、これらのことは直接私に語られたのではなく、むしろ極めて秘密裡に語られていたことであろう。しかし私の耳が、素早くそれを聞きとつたもののように思われる。

あの時、菊枝は見ても、言ってもいけないものと言つた。しかしたけのそんな話を聞いても、私はたけのどんな姿も想像することもできない。僅かに、血の池地獄の女亡者の姿が、私の頭に思い浮かぶばかりである。たけが哀れでならない。

女の人は結婚して、初めて母になるものようである。

私の母にしても、誰の母にしても、等しくそう言えるようである。従つて、誰にでも母があるように、父もある。父という存在は何であらうか。

しかしたけの場合は全く異なる。たけは結婚した女ではない。それでいて、子を産んだという。或は、女の人が子を産むためには、父の存在は関係ないもののようにも思われにくる。

が、たけの子は死んで、生れてきたともいう。それと、これと、何らかの関係があるのか。何か怪しい匂いも漂つて来るかのように、いよいよ不思議でならない。

私がそんな不思議について、尋ねてみようとすれば、やはり美代より他はなかるう。しかしそれが禁忌すべき問題であることは、私も知っている。私はその機会をとらえなければならぬ。

ふと、男衆の亀吉の存在が、私の気にかかつてくる。そう言えば、あの日、亀吉が母にひどく叱られていたのは、何故だろう。

勿論、後になって私が気づいたことであるが、その夜、亀吉もたけを送つて行つたらしく、提灯を開いてみたりしていた。

「ほんな紋のあるのなんか、以つての外やほん」

そんな亀吉を、母が叱り飛ばしていたのも、思い出され